

○南河内地域は、JA直売所や道の駅の整備をきっかけに**農産物の直売所出荷が盛ん**。切り花生産においては、市場出荷の産地がなかったことから、露地と簡易施設によるものがほとんどであり、出荷期が集中しやすく、**需要を踏まえた分散が課題**。

○農の普及課では、小規模な農家が冷蔵庫や加温等の高度な温度管理技術を用いない**開花調節技術の確立**（主力品目：ゆり）により直売所への出荷期分散を目指し、**栽培マニュアルを作成、技術を導入**を図った。

具体的な成果

- 1 芽伸ばし処理による出荷分散の実証
 ■ゆり凍結球の芽伸ばし処理（10℃冷蔵庫で1～3週間）を実施、特に**需要の多い12月の出荷技術を実証、普及**した。



- 2 小規模農家での年末出荷実現
 ■本格的な冷蔵庫がなくても、既存の米の保冷库や、**保冷剤を入れた保冷バッグでも芽伸ばし処理**ができることを実証、年末出荷が可能。

- ・出荷期分散：11月100%
 →11月30%、12月70%
- ・栽培球数増加：2倍

- 3 栽培マニュアルの作成
 ■実証展示の結果を取りまとめ、**栽培マニュアルを作成**し、技術普及に取り組んだ。
 ・新規技術導入 7戸



普及指導員の活動

平成25年度

- 農業革新専門員、南河内農の普及課、環農水総研、メーカーによる**PT設立**。
- 南河内農の普及課、JA営農指導員、直売所販売担当者が役割分担し、調査実施。

平成26年度

- 品質向上に関する**展示ほ設置**
- 農家導入に際して、技術と経営面からの調査と評価を実施。

平成27年度

- ・直売所ゆり出荷者への情報提供
- ・JA花き生産部会での試作と部会員への普及
- ・JA直売所**ゆり出荷農家に技術導入**

平成28年度

- ・**栽培マニュアル**（プレルーティング＋収穫後開花液処理）**作成**
- ・講習会、現地検討会開催

普及指導員だからできたこと

- ・**地域の実態に合った技術（小規模農家でも導入可能）**を提案し、研究所、メーカー、JAをコーディネートして実証することができた。
- ・**他地域への普及**をねらい、花き専門会議（研修）で現地検討会や情報提供を行った。

大阪府

小規模直売農家向けゆり開花調整技術の確立

活動期間：平成25～28年度

1. 取組の背景

大阪府南河内地域では、平成7年からオランダ産凍結球根を利用したゆりの栽培が始まった。平成20年代から直売所へのゆりの出荷が増加したが、露地や無加温ハウスでの栽培が多く、出荷時期は11月に集中していた。

そこで、出荷の分散、特に需要の多い12月の出荷技術を実証・普及するため、研究機関やJA等と連携して取り組んだ。

2. 活動内容（詳細）

平成25年に大阪府農政アクションプラン実践活動推進事業により実証ほを設置し、芽伸ばし処理（10℃冷蔵庫で1～2週間）による出荷分散を図る取組を始めた。

平成26年には、冷蔵庫のない小規模農家への簡易な芽伸ばし処理技術の普及を目指して農家保有の米貯蔵用の保冷库、または保冷資材を用いた次の表の2つの方法で現地実証を行った。

① 冷库

入荷した球根コンテナをそのまま米の保冷库に入れ、12℃に設定した（農家1戸）

② 保冷箱

技術検討会を開催し処理方法を実習した（農家3戸）。箱の底に球根を一行に置き、湿らせた鋸木くずでパックし新聞紙でくるんだ保冷剤を上にした。本方法は（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所での試験結果を参考に担当研究員のアドバイスを基に実施した。

平成27年には農家へ展示結果を示し、芽伸ばし処理技術の普及に取り組んだほか、栽培マニュアルを作成した。一方、12月初旬から降霜期に入り、蕾が成長すると露地や無加温ハウスでの栽培では、霜焼けや開花障害が発生してしまう課題が出てきた。

平成28年には、新たな課題に対し、研究所と切花鮮度保持剤メーカーの協力を得て、霜を避けるために無加温ハウス内で開花液を利用した蕾開花調整技術の実証に取り組んだ。

3. 具体的な成果（詳細）

保冷剤と発泡スチロール箱を使った芽伸ばしに関する簡易処理技術と、ハウスと露地を組み合わせることにより、1ヶ月半程度の出荷期間を確保できる可能性があることが分かった。

2年間の実証展示の結果を取りまとめ、平成27年度に栽培マニュアルを作成し、本技術の導入に取り組んだ結果、管内のゆり栽培農家15戸のうち、

7戸で本技術が導入された。

4. 農家等からの評価・コメント

これまで、無加温ハウスで11月出荷のゆりを栽培してきました。この芽伸ばし処理と開花液を使った蕾開花調節技術の導入により、加温しなくても需要の多い年末に出荷できるようになり大変喜んでいきます。(K町I氏)

5. 普及指導員のコメント

当地域は、直売所出荷の小規模農家がゆりを栽培しており、本格的な冷蔵庫も加温設備のあるハウスもない中で、保冷箱での芽伸ばし処理と開花液を使った屋内でできる蕾開花調節技術の導入で11月から年末までゆりを出荷拡大させることができる技術として普及に取り組みました。

また、本技術は、研究所、メーカー、JA、農業革新支援専門員(普及指導員)の連携により、普及が現場の農家実態に合わせて、2つの技術を組立実証して完成した技術です。

(南河内農と緑の総合事務所農の普及課 課長補佐 森本 和樹)

6. 現状・今後の展開等

現在、直売所での切り花の需要は拡大しており、本技術の導入による出荷拡大や年末需要期での有利出荷、加温が必要な時期での無加温栽培による省エネ栽培等のメリットを講習会等で説明し、いっそうの普及拡大を目指す。